

目次

【2010年 聖書講筵レジュメ (配付資料等)】

2010年

?未 2010年1月 『神の思い』と『人の思い』 —真に豊かな人生への道—

2010年1月31日 (奈良)

2010年5月 福音特別セミナー レジュメ

2010年5月29～30日 (御殿場YMCA東山荘)

2010年6月 ヨハネによる福音書の総括 (キリスト道講演会)

2010年6月13日 (東京)

2010年7月 新約聖書『ローマ書』(第1回) レジュメ

2010年7月18日 (東京新宿)



講筵レジュメ

2010年5月 福音特別セミナー

2010年5月29～30日(御殿場YMC A東山荘)

●第一 神と人 ——存在次元——

神も人も霊的存在者

「³わたしは、あなたの指のわぎなる天を見、あなたが設けられた月と星とを見て思います。⁴人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。⁵ただ少しく人を神よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、⁶これにみ手のわぎを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。」(詩篇8:3～6口語訳)

「神は霊なれば、拝する者も霊と真^{まこと}とをもて拝すべきなり。」(ヨハネ4:24)

霊的人格キリストは、地上では人として我々と同じ形、姿でありながら、霊的存在として、霊の次元、天の次元を具有し、それが肉に対して優位を占めていた。人の姿をとりながら、神の霊の充満体であった。神に「父よ」と呼びかけ、父なる神の御意^{みこころ}を一切としてこれに全托し、祈りの中で父なる神と一つであった(私を見た者は父を見たのだ。私と父とは一つである。ヨハネ14:9、10・30)。

我々はどうか。霊的人格・霊的存在者として、霊の次元、天の次元に生きるべき存在でありながら、生身の人間(肉なる存在としての人間)は、肉の次元、地の次元にしか生きられない。その意味で、失われた存在である。

なぜ、そうなのかは、ローマ書5・12によれば、

「ひとりの人(アダム)によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。」(ロマ5・12口語訳)

また、

「罪の支払う報酬は死である。」(ロマ6・23)

と。やうかい、

「⁵……肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思う。⁶肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである。⁷なぜなら、肉の思いは神に敵するからである。¹³……もし、肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬほかはない」(ロマ8:5～7、8・13)

と宣言されている。また、



「血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。」(コリント前15・50)

「人あらたに生れずば、神の国を見ること能わず」(ヨハネ3・3)
 「人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能わず、肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり。」(ヨハネ3・5～6)

●第二 キリスト・イエスの義の故に、我らは神の子なり

「あなたは何者ですか？」
 と問われたとき、

「はい、神の子です。」
 とはつきり答える。

「どうして、そんな大それたことが言えるのですか？ あなたは、ただの人間でしよう？ 人間から生まれた者は人間、神から生まれた者なら神の子と言えるけれども、あなたは人間の子でしよう？」

「霊から生まれる者は霊、肉から生まれる者は肉」「神は霊なれば……。」とあるじゃないですか。あなたは、肉から生まれた、ただの肉なる人間でしよう？」

これに対する答え…

「¹¹かれ(霊なるキリスト)は(受肉のイエスとして)己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。¹²されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。¹³かかる人は血脈ちすじによらず、肉の欲ねがひによらず、人の欲ねがひによらず、ただ神によりて生れしなり。」(ヨハネ1・11～13)

「¹²しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。¹³それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。」(口

語訳)

「なぜ、イエス・キリストの名を信じるだけで神の子とされるのですか？ 彼を受けいれるとはどういうことですか？」

それに対する答え…

旧約の世界は、「律法による義」を追い求めた。「義」とは、神に受け入れられること、神に喜ばれること、その結果として神の祝福が臨む。その祝福の内容は、かなり現世的なものであり、必ずしも、「永遠の命」とか、「神の国を受け嗣ぐ」とかいった霊の次元のもではなかった。律法はモーセの十戒を中心とした、様々の戒律から成っていた。それを守ることに關して、申命記30・15～20では次のように述べられている。



「¹⁵見よ、わたしは、きょう、命ときいわい、および死と災をあなたの前に置いた。¹⁶すなわちわたしは、きょう、あなたにあなたの神、主を愛し、その道に歩み、その戒めと定めと、おきてとを守ることを命じる。それに従うならば、あなたは生きながらえ、その数は多くなるであろう。またあなたの神、主はあなたが行って取る地であなただを祝福されるであろう。¹⁷しかし、もしあなたが心をそむけて聞き従わず、誘われて他の神々を拝み、それに仕えるならば、¹⁸わたしは、きょう、あなたがたに告げる。あなたがたは必ず滅びるのである。¹⁹……わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならぬ。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。²⁰すなわちあなたの神、主を愛して、その声を聞き、主につきしたがわなければならない。そうすればあなたは命を得、かつ長く命を保つことができ、主が先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えたと誓われた地に住むことができるであろう。」(申命記30・15～20口語訳)

イエスの時代には、律法の遵守それ自体が、自己目的となっていた。イエスは、律法の根本精神を回復しようとなさつた。それは、神を第一とすること…

「イスラエルよ聴け、主なる神は唯一の主なり。なんじ心を尽し、精神を尽し、思を尽し、力を尽して、主なる汝の神を愛すべし」

(「まず、神の国と神の義を求めよ」)

次に、

「口のごとく隣人を愛すること」

であった(マルコ12・29～31)。

そして、「永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか」との問いに対して、「誠命は汝が知るところなり」と言つて、十戒を列挙された。しかし、イエス自身は、十戒を遙かに超えた神的次元(霊の次元、極限の愛の次元)に生きておられた。

パウロは、律法について次のように告白している。すなわち、律法そのものは聖なるもの、霊なるもので、本来は人を生命(いのち)に導くべきはずのところ、かえつて、死に至らせることを見いだしたと。

「¹⁰……我は生命に至るべき誠命の反つて死に到らしむるを見出せり。¹¹これ罪は機に乗じ誠命によりて我を欺き、かつ之によりて我を殺せり。……¹²……

…罪は罪たることの現れんために、善なる者(律法)によりて我が内に死を来らせたるなり。……¹⁴……我は肉なる者にて罪の下に売られたり。」(ロー

マ7・9～14)

このように、律法による義の追求は、人を霊の死に至らせるだけであつた。それは、肉なる人間(生まれながらの人)は、生来、利己的・自己中心のであり、神を第一とすること、



己のごとく隣人を愛することなど、恒常的には不可能なことだからである。

「²¹然るに今や律法の外に神の義は顕れたり。これ律法と預言者とに由りて証せられ、²²イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。之には何等の差別あるなし。²³凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、²⁴功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。……²⁸我らは思う、人の義とせらるるは、律法の行為によらず、信仰に由るなり。」(ロマ3・21～28)

「³肉の弱さのために律法がなしえなかつたことを、神はしてくださったのです。つまり、罪をとり除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。⁴それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。」(新共同訳・ロマ8・3～4)

「¹⁴神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。¹⁵あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アツバ、父よ』と呼ぶのです。¹⁶この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に becoming 証ししてください。¹⁷もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。」(ロマ8・14～17)

「²⁶汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。²⁷凡そバプテスマに由りてキリストに合いし汝らは、キリストを衣ぎたるなり。」(ガラテヤ3・26～27)

「³……キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。⁴すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいのちに生きるためである。……⁶……わたしたちの内うちの古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだからだが滅び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである。⁷それは、すでに死んだ者は、罪から解放されているからである。⁸もしわたしたちが、キリストと共に死んだなら、また彼と共に生きることことを信じる。⁹キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことを、知っているからである。¹⁰なぜなら、キリストが死んだのは、ただ一度罪に対して死んだのであり、キリストが生きる生きるのは、神に生



きるのだからである。¹¹このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだ者であり、キリスト・イエスにあつて神に生きている者であることを、認むべきである。」(口語訳 ロマ6:3～11)

「¹⁵わたしたちは生まれながらのユダヤ人であつて、異邦人なる罪人ではないが、¹⁶人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によつて義とされるためである。なぜなら、律法の行いによつては、だれひとり義とされることがないからである。……¹⁹わたしは、神に生きるために、律法によつて律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。²⁰生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によつて、生きているのである。²¹わたしは、神の恵みを無にはしない。もし、義が律法によつて得られるとすれば、キリストの死はむだであつたことになる。」(口語訳 ガラテヤ2:15～21)

「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜つたことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。……²愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。」(口語訳 ヨハネ1:3:1～2)

以上のように、私たちが「神の子」であるのは、生身の人間(肉なる人)が当然に、あるいは修行による自己変革によつて、そうなるのではなく、「旧き人」(肉なる人)が十字架上で死に、「新しき人」に生まれ変わる(新生する)ことによる、すなわち、信仰の現実においてキリストと一体化することにおいてである。信仰的現実(霊の次元)において「神の子」とされているのである。それは、神の賜う「無条件・絶対の恵み」なのである。

●第三 神の子(天国人)の内実は、聖霊(キリストの御霊)

神の子(天国人)の内実は、内住し給うキリスト(聖霊・キリストの御霊、御霊のキリスト)である。

「もはや我生くるに非ず、キリストわが内に生き給うなり」

の「キリスト」は、「御霊のキリスト」のことである。パウロは

「キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず」(ロマ8:9)



と言う。そして、

「¹⁴すべて神の御霊（キリストの御霊）に導かるる者は、これ神の子なり。¹⁵汝らは……子とせられたる者の霊を受けたり、……¹⁶御霊みずから我らの霊ともにも我らが神の子たることを証す。」（同8・14～16）

と。それでは、聖霊（キリストの御霊）を受ける道は何か。どうすれば、聖霊（キリストの御霊）をいただくことができるのか。その道は「祈り」である。

「祈り」とは、「十字架のキリストの中に己を投げ入れること」だと小池先生は言われた。パウロは、コリント人への第一の手紙の中で

「……あなたがたの所に行ったとき、神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。²なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のこととは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。」（コリント一2・1～2）

と述べ、また、ガラテヤ人への手紙において、

「ああ、物わがりのわるいガラテヤ人よ。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか。²わたしは、ただこの一つの事を、あなたがたに聞いてみたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか。」（ガラテヤ3・1～2）

と問いただしている。

十字架の主キリストを信じ受けとる（信受する）こと、

「十字架の主様、あなたの十字架の上でわたしも一緒に死にました。あなたは、十字架上に旧いわたし、肉のわたしを葬りさってくださいました。十字架上で、わたしはあなたと一つです。一体です。もはや、旧い肉なるわたしは生きていません。どうか、あなたの聖霊（御霊）を注ぎ込んでください。御霊の主様が内住してください。お願いいたします。」

と祈ります。

御霊を賜うことは父なる神の御意であり、約束です。御霊となつてわたしの中に、あなたの中に宿ることが、主キリストの願いです。ヨハネ福音書14～16章において、明らかに、十字架と聖霊（御霊）とは、一体です。十字架を深く受けとれば（十字架を瞑想して、十字架の主様と一つである、十字架上で主は私を抱きしめてくださっていると）、聖霊（御霊）はすでに来てくださっているのです。

「¹⁸わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところへ帰つて来る。¹⁹……あなたがたはわたしを見る。わたしが生きるの、あなたがたも生きるからである。²⁰その日には、わたしはわたしの父におり、あなたがた



はわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるであろう。」
 (口語訳 ヨハネ14・18～20)

●第四 神の子(天国人)の現世(地上)での在り方・生き方

福音書(マタイ、マルコ、ルカの共観福音書)のキリストの言葉(いわゆる「山上の垂訓」や、その他、人々に語られた奨めの言葉)は、神の子(天国人)を想定して語られたものと解すれば、なるほどそうだ、その通りだ、と納得がいく。肉なる人間のすがた(相)のまままで読むと、とんでもない、こんなことは不可能だ、とてもじゃない、と反発するか、失望・落胆するか、のいずれかであろう。

パウロの手紙においても、必ず、まず、私たちはどういう存在であるのか、生身の肉の人間の姿と、そこから贖い出されて救いにあずかった「新しいわたし」とが対比され、「恵みにより、信仰により」新しく生れたあなたは、それにふさわしい「新しい生き方」をするのが当然だよ、という風に語りかけ、奨めを提示している。それは、もはや、いわゆる掟(誠律、律法)ではなく、良心(内なる声)の欲求なのである。

現実にはしかし、我々の置かれている場合は、生易しいものではない。神の子・天国人・霊なる人が、この世に生きることが、なんと難しいことであろうか。この世の人たちは、「一元的」に生きている。神の世界も、霊の次元も無関係で、ただ「この世」の見える世界の中だけで生きる。永遠の生命とか、来生の希望とかとは無縁であり、この世的な価値だけを追求し、そこに働く原理は、「肉」(自己中心、エゴイズム、争い、憎しみ、不信、ねたみ、等々、パウロが肉の働き、ないし、肉の結ぶ実、と言っていること)である。クリスチャンは、一方で(つまり、信仰の現実においては)「霊なる人」としての存在でありながら、他方では、肉体を具えた生身の人間である点では「この世の人」と少しも変わらない。そして、この世で生きていかなければならない。ここに、摩擦が生じ、自分自身の中に葛藤が生じる。信仰面においては、神様のご期待にそえていない、こんな自分でいいのだろうか、という懷疑であり、社会生活においては、「神の国」(天の次元、霊の次元)と現実の世(周囲)との落差の大きさ(ギャップ)にどう対処していいかわからないで悩む(嵩ずれば鬱になる)のである。それを乗り越える道は、「祈り」しかない。いつも「内住の御霊のキリスト」に祈り、すがることができる。もともと、弱き者、無能なる者、無きに等しき者、を選び出してくださったのである。主キリストは、すべてをご存知である。

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあつて平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。

わたしはすでに世に勝っている。」(口語訳 ヨハネ16・33)

「²⁸すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。²⁹わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、



わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。³⁰わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(同 マタイ11・28～30)

そして、「主の祈り」を真心こめて唱えること、祈ることである。

それと同時に、どんなときにも、ひるまない、たじろがない、失望落胆することがあっても絶望はしない、体当たりの困難に立ち向かっていく、という姿勢が大切である。

「²³……だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。²⁴自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを救うであろう。」(同 ルカ9・23～24)

以下、現実生活の諸側面における心得について

I 集会生活において

ローマ書12章、14章、章1～7

コリント第一書12章、13章

ガラテヤ書5章

エペソ書4・1～7、4・11～16、6・10～20

ピリピ書2・1～15

コロサイ書3・12～17

II 家庭生活において

夫婦の関係 エペソ書5・22～33、コロサイ書3・18～19

親子の関係 エペソ書6・1～4、コロサイ書3・20～21

III 対人関係一般

基本的には、コリント前書13章、ローマ書12・14～21

さらに、コリント前書9・19～23、ローマ書14・18～19

また、我々は、世の人に対して「あの人は信仰を持たないから」といった偏見を懐かないように、心掛けるべきである。「善きサマリヤ人」の譬え話のように、非クリスチャンでいつくしみ深く、愛に満ちた人が多くいる。神様は公平である。ローマ書2・1～16参照、とくに同2・6～11。



キリスト道講演会レジュメ

2010年6月 ヨハネによる福音書の総括

2010年6月13日(東京)

第1章 1〜18 序文

この箇所は、序文であるとともに、総括でもある。

天地・万物の創造前からの霊なる実在者である父なる神と、同質の霊なる実在者である御子キリストとの共在のすがたを語る(①)。

万物は、このお方(御子キリスト)によって創造された。このお方は、生命であり、光であり、愛であった。

霊なるキリストは、受肉して人々の間に、即ち、人間界に住まわれた。神は、このお方を信じて受け入れる人を「神の子」とする道を開かれた(②)。

かつては、律法の実行による義の道がモーセを通して示されたが、「恵みと真理」の化身であるイエス・キリストを信じ受けとることによって、天国(永遠の生命)に至る道が開かれたのである。

受肉のイエスは、地上においても、その全存在が、いつも父なる神の懐に懐かれてあり、このお方だけが、見えない神(根源的・霊的実在者である見えない神)を顕したのである(③)。

①17・5参照、②3・13〜18、同31〜36、③14・9。

第1章19〜 重要なところ：

「見よ、これこそ世の罪を除く神の子羊」(1・29)

「これぞ、聖霊にてバプテスマを施す者」(1・33)

「見よ、これぞ神の子羊」(1・36)

第3章

「人あらたに生まれれば、神の国を見ることは能わず」

「人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず、肉によりて生

まらる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。」

新生への道は、神の遣わし給うた御子キリストを信じ受けとる(信受すること)。

第4章 サマリヤの女との対話 キリストは「永遠の生命の水」の源泉

真の礼拝：

「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり」



イエスの食物・・

「われを遣し給える者(父なる神)の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、これ、わが食物なり。」

第5章 ベテスダの池での癒し(38年間、病に悩む人に対して安息日に)

「わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり」

無的実存者(無者) イエス・・「子は、自ら何事をも為し得ず」

第6章 大麦のパン五つと小さき魚二つ

「我は生命のパンなり」

「わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る、是なり。」

「われ(というパン)を食う者は永遠に活きる」

「活かすものは霊なり、肉は益するところなし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」

第7章 仮庵の祭りにて

「わが教えはわが教えにあらず、我を遣し給いし者の教えなり。人もし御意を行わんと欲せば、この教えの神よりか、我が己より語るかを知らん。」

第8章

「われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」

「なんじらは下より出で、我は上より出づ、……汝らもし我の夫それなるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし」

「我を遣し給いし者(父なる神)は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行うによりて、我を独りおき給わず」

真理は自由を得させる・・

「汝ら常にわが言に居らば、真にわが弟子なり。また真理を知らん、真理は汝らに自由を得さすべし」

「人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし」

「アブラハムの生れいでぬ前より我は在るなり」

第9章 生まれながらの盲人の癒し

「この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。」



第10章 羊と羊飼

「我は羊の門なり」

「我は善き牧者なり、我は羊のために生命を捨つ。」

「人これを我より取るにあらず、我みずから捨つるなり。」

「我かれらに永遠の生命を与うれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、彼らをわが手より奪う者あらず。……誰にても(彼らを)父の御手よりは奪うこと能わず。我と父とは一つなり」

第11章 死せるラザロを復活させたもう

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を

信する者は、永遠に死なざるべし。」

第12章 ラザロの宅にて マルタとマリヤ マリヤによる香油の注ぎ

「二粒の麦、地に落ちて死なずば」

総括の言…12・44～50

第13章 弟子の足を洗い給うイエス

新しき戒めの付与(汝ら相愛すべし)

第14章～第16章 別れに際して弟子たちに語る(訣別遺訓)

第17章 最後の祈り(大祭司の祈り)

第18章～第19章 十字架への道 ピラトとイエス 十字架の上で

第20章 死人の中より甦うちえり給いしイエス 「マリヤよ」「ラボニ」

第21章 テベリヤの海辺にて



キリスト道講演会レジュメ

2010年7月 新約聖書『ローマ書』(第1回)

2010年7月18日 (東京新宿)

● 1 新約聖書の中での『ローマ書』の位置づけ

書かれたのは紀元56〜57年頃かと考えられている。コリントから書き送られた。

パウロは、スペインへ行くつもりで、先ずエルサレムを訪問した後、しばらくローマに滞在する計画を立てていた。『ローマ書』はその準備のために記された(15・22〜25、28〜29参照)。

はじめに4福音書との関係をみておく。マタイ・マルコ・ルカの3福音書は、「共観福音書」と呼ばれる。共通点は、イエス・キリストの伝道活動を時間的順序に従って再現しようとしていることである。マルコ福音書を原型として、マタイ福音書では旧約聖書(律法と預言書)との対比においてキリストの告知された福音の内容が遙かにそれを超えた深く高い内容のものであるかがキリストの言葉と御業において顕されている。ユダヤ教から改宗してキリスト信者になった者やユダヤ教徒への語りかけの面が顕著である。ルカ福音書は異邦人への語りかけの面が強く現れていて、旧約聖書との対比はほとんど出てこない。こうした違いは見られるものの、共通点は、キリストの説かれた福音の内容は、父なる神(天の父)の無条件・絶対の愛と、人の側ではそれを無条件に受けとること(神の愛の体現者はイエスご自身であるから、この方を信じ受け入れること)が救いであることをしめしていることである。そして、キリストご自身の父なる神への無条件の信従(従順)・平伏しの姿(相)が描かれるとともに、宗教的指導者層(祭司、律法学者、パリサイ人ら)の偽善や律法への固執、そこから来る同胞への愛の欠如が厳しくとがめられている。他方では、イエスは決して律法を否定しておられない。むしろ、その根本精神を尊び、その成就を願っておられる。もともと重要な掟は何かをめぐる問答において、明確に「心を尽し、精神を尽し、思いを尽し、力を尽して、あなたの神である主を愛すること」と「隣人を自分自身のように愛すること」を示された(マタイ22・34〜40、マルコ12・28〜34、ルカ10・25〜28)。また、「永遠の生命を受け継ぐ道」を求めての問答において、モーセの十戒を挙げて答えておられる(マタイ19・16〜22、マルコ10・17〜22、ルカ18・18〜23)。

要約すれば、キリストにすがりつく以外に救い(罪・咎の重荷、重篤な病の苦しみ、死の恐怖、貧窮のどん底での苦しみの解決)の道を見出し得ない人々にとっては、神の無条件の愛を信受し、御意に己が身を捧げることが福音であったのに対し、律法遵守を旨とし、偽善の中にありながら己を正しき者と自認して他を裁く人たちに対しては、真の律法の体現の姿を示されたのである。

ヨハネ福音書では、全く様相が異なる。律法遵守による「永遠の生命」の獲得といった



ことは問題とされていない。

「人は新たに生れなければ、神の国に入ることができない。」

「肉から生れる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である。」

「人を活かすものは霊であって、肉は役立たない。私の語った言葉は、霊であり生命である。」

「神は霊であるから、拝する者も霊と真をもって拝さなければならぬ。」

「神はその独り子を賜ったほどに世を愛してくださった。信じる者が滅びないで、永遠の生命を得るためである。」

「神が遣わされた者を信じるのが、神の業である。」

そして、14〜16章では、聖霊・助け主・真理の御霊のことが語られ、このお方に内住していただき、このお方に導かれ、一如となつて生きることが御旨にかなう道であることが示されている。

成立年代からみれば、『ローマ書』は、57年前後とされているのに対し、マルコ福音書は65〜68年頃、マタイ福音書とルカ福音書は80年代、ヨハネ福音書は90〜125年頃とされている。

『ローマ書』の特色・内容はこの講演において、順次見て行くこととする。

● 『ローマ書』の内容(要点)

1、第1章

1・1 キリスト・イエスの僕、使徒、福音の使者

1・2〜4 福音とはイエスに関するおとずれ(使信)の全体⇨イエス・キリストの全体

1・16 この福音は、すべて信ずる者に救いを得させる神の力

1・17 神の義は、その福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。

2、第2章

「神には偏り視給うことなし」

外面・外見・外側ではなく、内面・内実が大切

3、第3章

「義人なし、一人だになし」

律法遵守によっては、誰一人として神の前に義とされない

「然るに今や律法の外に神の義は顕れたり」⇨「神の義は福音の中に顕れたり」

イエス・キリスト(霊的人格・復活して神の御許にいまし、今も生きて働いておられるキリスト)に帰依・帰入・祈入すること、全托することが「信仰」の実質

4、第4章

「主は我らの罪のために付され、我らの義とせられんために甦えらせられ給えらるなり。」(4・25)

